

〈資料紹介〉

薄田泣菫「おとゞひ」(松枝家所蔵) 翻刻

——新体詩「兄と妹」(『暮笛集』所収)の原型

加藤 美奈子

新体詩「兄と妹」と「おとゞひ」

薄田泣菫の新体詩「兄と妹」は、「新小説」第四年第四卷(春陽堂 明治三十二年三月)に掲載され、泣菫にとって最初の新体詩集である『暮笛集』(金尾文淵堂 明治三十二年一月)に収められている。

松村緑編「薄田泣菫年譜」(『日本近代文学大系 第一八巻 土井 晩翠・薄田泣菫・蒲原有明集』角川書店 昭和四七年)の、「明治三十二年(一八九九) 二三歳」の項目には、「三月、「兄と妹」(愛妹と呼んで詩歌の手ほどきをした四歳年少の隣家の長女、三宅薫に贈った長編詩)」とある。

松枝喬(元倉敷市議会議長・前倉敷文化連盟会長)談『泣菫詩碑

建立の思い出』(薄田泣菫顕彰会事務局 第一版 平成一三年三月 第二版 平成一四年三月)には、「おとゞひ」——泣菫先生の初恋」と題して、「兄と妹」の「妹」になぞらえられる「三宅薫」の弟である三宅千秋氏から、薫に贈られた泣菫自筆の「おとゞひ」を譲り受けた経緯が語られている。同書は、松枝喬氏の談話の筆録で、氏は「薄田家の主治医」で泣菫と親しく交流のあった松枝新氏あしたを父とされ、薄田泣菫顕彰会の初代会長に就任されていた(三宅昭三「第二版あとがき」(同書))。

「おとゞひ」は、「兄と妹」の原型となった私家版で、能筆であった泣菫自筆の「小さな手書きの本」(同書)である。松枝氏によると、「薫さんは明治十四年生まれで、泣菫先生より四歳年下ですが、

写真に見るように大変美しい方であります。泣董先生は語学が大変達者であり、隣の家の千秋さんに英語を教えていたそうです。そういう関係で千秋さんのお宅にはしょっちゅうお行きになっています（同書）という間柄であったという。

泣董自筆「おとどひ」と、初出誌「新小説」掲載・『暮笛集』所収の「兄と妹」は、近似した表現・形式で構成されているが、幾つかの異同が各々に見受けられる。

「おとどひ」（後掲〔05才〕）には、次のようにある。

世にかしきは吾兄の

花鶯流音する行き見よと

初出誌では、同じ部分が、「世にかしきは吾兄の／＊＊音する行き見よと」と、「花鶯流」、すなわち「かおる（薫）」の名前が、伏せられた表記となり、総ルビとなっている。『暮笛集』では、「世にかしきは、吾兄の／『縁』音する、行き見よと」とされている。妹の名が『縁』と変えられ、読点が付されている。

後年、泣董生前に刊行された『薄田泣董全集 第一巻 詩篇上』（創元社 昭和二年十二月）・『泣董詩抄』（岩波文庫 一九二八年五月 第一刷）にも、「兄と妹」は採録されている。こちらには、語句のみならず連の構成にもかなりの異同が確認され、先の引用に該当する箇所が、『全集』では、「世にかしきは、わが兄の／厨のかたに音すると」となっている。引用部分に関しては、連の構成そのものは異なっていないが、全体的にルビが減らされ、平仮名表

記が多くなり、ここでは妹への呼びかけが無くなっている。『詩抄』では、「世にかしきは、吾兄の／厨のかたに音すると」と、表記に若干の差異は見受けられるものの、概ね『全集』を踏襲している。

「兄と妹」については、旧稿で与謝野晶子への影響を論じたが（拙稿「薄田泣董『暮笛集』と与謝野晶子『みだれ髪』―新体詩「尼が紅」「兄と妹」、『みだれ髪』同時代評をめぐって―」（岡大國文論稿）第三七号 平成二年三月）、泣董の代表的な詩作の一つである。

本稿では、その原型となった「おとどひ」の影陰と翻刻を紹介することで、泣董の詩業の原点の一端を示すことが出来ればと考えている。なお、初出誌その他に掲載・再録された「兄と妹」との表現の異同・内容の比較に関して、稿を改めて論じたい。

今回の貴重な影陰資料は、薄田泣董顕彰会事務局長・三宅昭三氏に仲介の労をとって頂いた。撮影も三宅昭三氏によるもので、ご自身も翻刻と所見を示されており、今回の翻刻にあたってはそれを基として精査させて頂くことが出来た。資料掲載をご承諾くださった、故・松枝喬氏ご遺族の松枝家、並びに三宅昭三氏に、改めて感謝申し上げます。

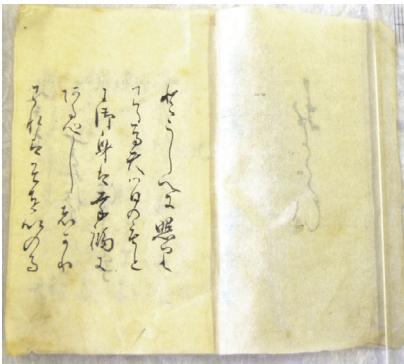
「おとゞひ」影陰及び翻刻

原則として、翻刻の漢字は新字体に改めたが、仮名遣いは原文に従った。改行は、原文に従った。

頁の番号は、見開き左側に薄く記入されている頁番号に、便宜上準じ、01〜37（それぞれ表面を「オ」、裏面を「ウ」として示した）とした。なお、表紙は00、裏表紙は38とした。

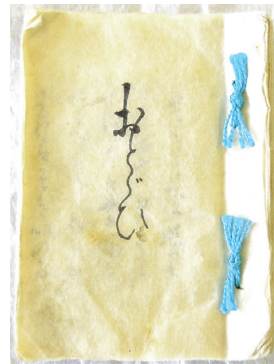
本体は、縦八・五センチメートル×横五センチメートル、和紙の袋綴じ、二箇所を紐で綴じた体裁である。

撮影は三宅昭三氏によるものであるが、印刷を考慮し、画像データの明るさとコントラストに若干の調整を加えた。



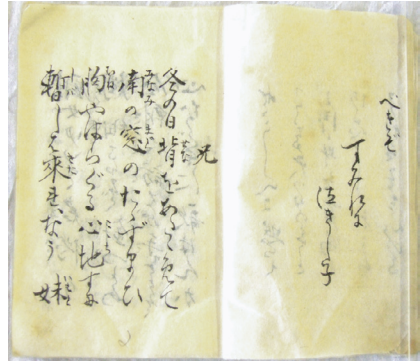
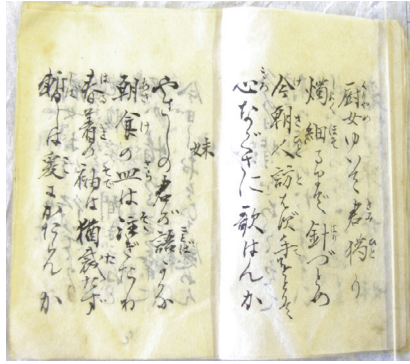
〔01オ〕

とこしへに照り
わたる天つ日のもと
に御身は幸福に
あるべし しかり
われはそをいのる



〔00オ〕（表紙）

おとゞひ



〔01ウ〕

べきぞ

すみれに

泣きし子

〔02オ〕

兄

冬の日背をあたくめて
南の窓のたゞずまひ
胸やはらぐる心地す
暫しは来れ、なう妹

〔02ウ〕

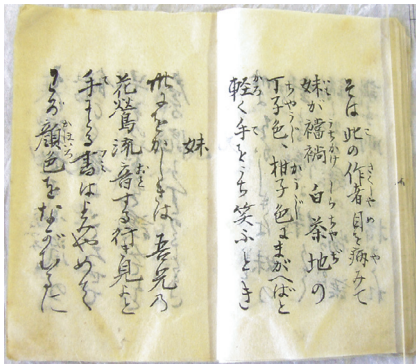
厨女ゆいて君独り

燭細るまで針つとめ
今朝人と訪はず手とりて
心なぐさに歌はんか

〔03オ〕

妹

やさしの君が語かな
朝食の皿は注ぎたり
春着の袖は猶裁たず
暫しは爰にかたらんか



〔03ウ〕

厨女「お竹」行いてより
抱腹笑聞きえねど
兄が情ある言の葉に
今日しおもひを慰めん

〔04オ〕

兄

世にかしきは妹の
針とる傍に侍りて
誦し出る恋の物語
調子剛しと指ざれ

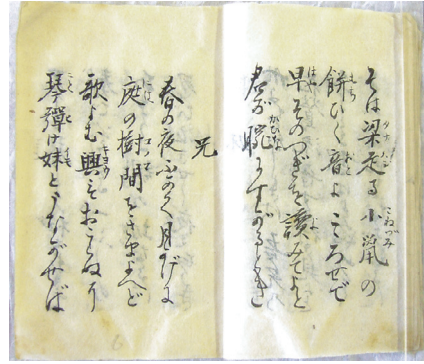
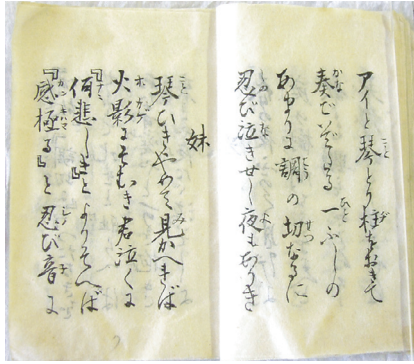
〔04ウ〕

そは此の作者目を病みて
妹が襦袢白茶地の
丁字色、柑子色にまがへばと
軽く手をうち笑ふとき

〔05オ〕

妹

世にかしきは吾兄の
花鶯流音する行き見よと
手にとる書はよみやめて
わが顔色をながむるに



〔05ウ〕

そは梁走る小嵐の

餅ひく音よころせで

早そのつぎを讀みてよと

君が腕にすがるとき

〔06オ〕

兄

春の夜ふかく月かげに

庭の樹間をさまよへど

歌よむ興もおこらぬに

琴弾け妹とうながせば

〔06ウ〕

アイと琴とり柱をおきて

奏でいでたる一ふしの

あまりに調の切なるに

忍び泣きせし夜もありき

〔07オ〕

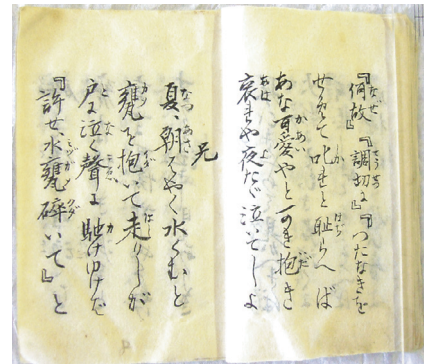
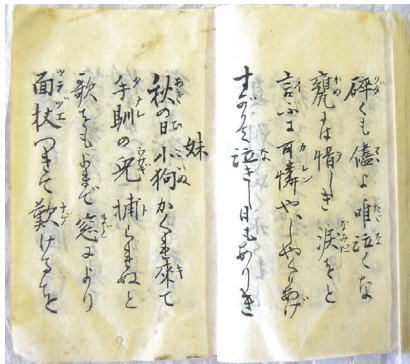
妹

琴ひきやめて見かへれば

火影にそむき君泣くに

『何悲しき』とよりそへば

『感極る』と忍び音に



〔07ウ〕

『何故』『調切に』『つたなきを』

せめて叱れと耻らへば

あな可愛やとかき抱き

哀れや夜たゞ泣いてしよ

〔08オ〕

兄

夏、朝はやく水くむと

甕を抱いて走りしが

戸に泣く声に馳けゆけば

『許せ、水甕砕いて』と

〔08ウ〕

砕くも儘よ唯泣くな

甕には惜しき涙をと

言ふに可憐や、しやくりあげ

すがりて泣きし日もありき

〔09オ〕

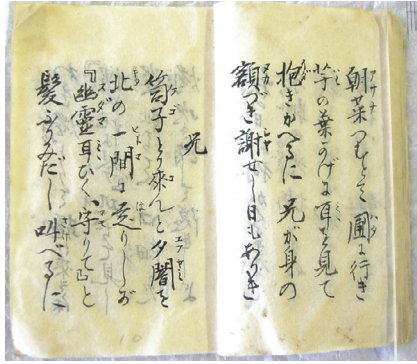
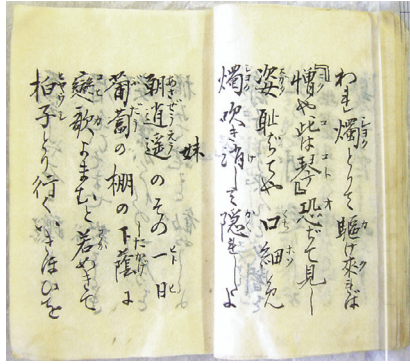
妹

秋の日小犬かくれ来て

手馴の兎捕られぬと

歌をもよまで窓により

面杖つきて敷けるを



〔09ウ〕

朝菜つむとて圃に行き
芋の葉かげに耳を見て
抱きかへるに兄が身の
額つき謝せし日もありき

〔10オ〕

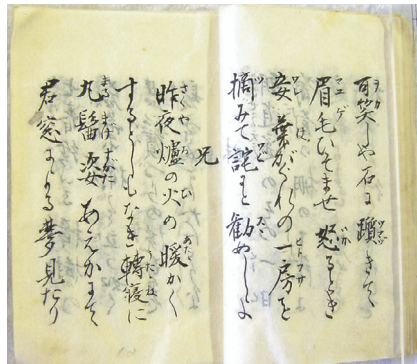
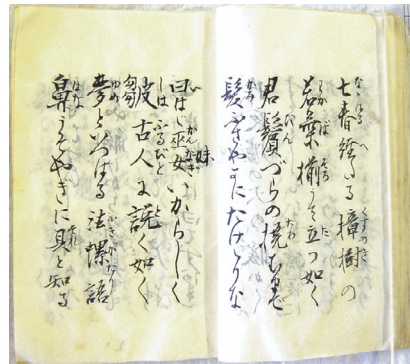
兄
笛子とり来んと夕闇を
北の一間に走りしが
『幽霊耳ひく、守りて』と
髪ふりみだしし叫べるに

〔10ウ〕

われ燭とりて駆け来れば
『憎や、此は琴』恐ぢて見し
姿耻ぢてや口細め
燭吹き消して隠れしよ

〔11オ〕

妹
朝道遙のその一日
葡萄の棚の下陰に
恋歌よまむと若めきて
拍子とり行くいきほひを



〔11ウ〕

可笑しや石に躓きて
眉毛ひそませ怒るとき
妾葉かくれの一房を
摘みて詫にと勧めしよ

〔12オ〕

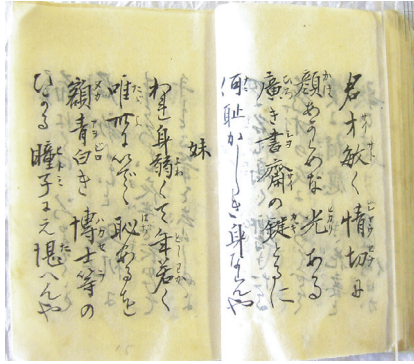
兄
昨夜爐の火の暖かく
丸鬚姿あえかにて
君窓による夢見たり

〔12ウ〕

七春経たる樟樹の
若葉揃うて立つ如く
君鬢づらの撓むまで
髪ふさやかにたけりりな

〔13オ〕

妹
日は巫女いからしく
皺古人に説く如く
夢といつはる法螺語
鼻うそやぎに其と知る

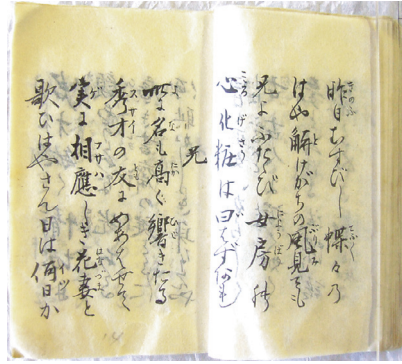


君才敏く情切母
顔あからめな光ある
広き書齋の鍵とるに
何耻かしき身ならんや

妹

われ身弱くて年若く
唯世にいで恥あるを
額青白き博士等の
ひかる瞳子にえ愼へんや

〔15才〕

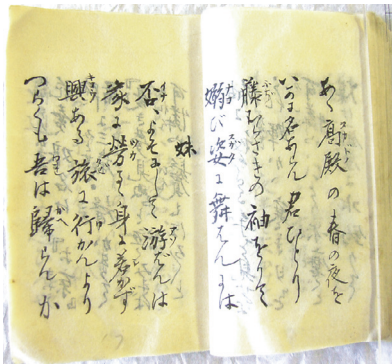


昨日むすびし蝶々の
はや解けがちの風見ても
兄よふたゝび女房の
心化粧は日はずあれ

兄

世に名も高く響きたる
秀才の友にめあはせて
実に応しき花妻と
歌ひはやさん日は何日か

〔14才〕

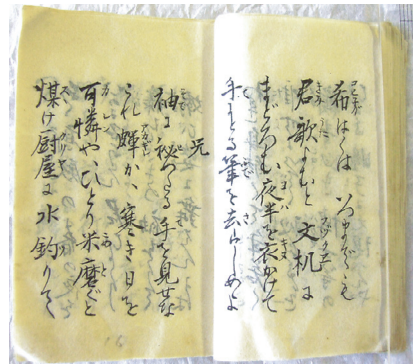


高殿の春の夜を
いかに名あらん君ひとり
藤むらさきの袖をりて
嬋び姿に舞はんには

妹

否、よそにして遊ばんは
家に劣るゝ身に若かず
興ある旅に行かんより
つらくも吾は帰らんか

〔17才〕

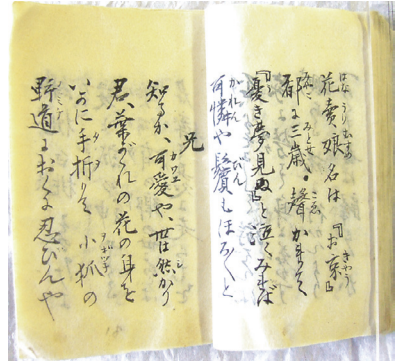
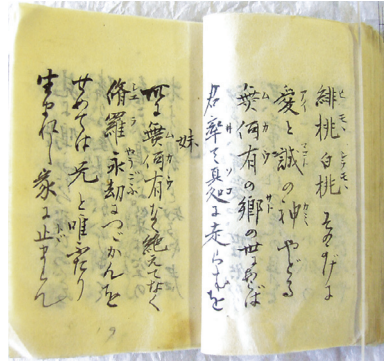


希はくはいつまでも
君歌よむと文机に
まどろむ夜半を衣かけて
手にとる筆を去らしめよ

兄

袖に秘めたる手を見せな
これ輝か、寒き日を
可憐や、ひとり米磨ぐと
煤け厨屋に水釣りて

〔16才〕



〔17ウ〕

花売娘名は『お京』
都に三歳、声かれて

『憂き夢見ぬ』と泣くみれば
可憐や鬢もほろく」と

〔18オ〕

兄

知るか、可愛や、世は然かり
君、葉がくれの花の身を
いかに手折りて小狐の

野道におく忍びんや

〔18ウ〕

緋桃白桃そのかけに

愛と誠の神やどる

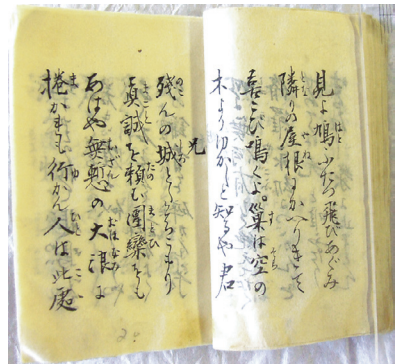
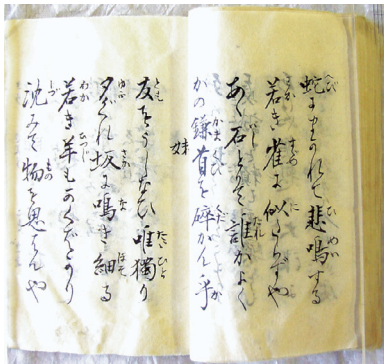
無何有の郷の世にあらば
君率て其処に走らむを

〔19オ〕

妹

世に無何有なく絶えてなく
脩羅永劫につゞかんと

せめては兄と唯ふたり
生まれし家に止まらん



〔19ウ〕

見よ鳩ふたつ飛びあぐみ
隣りの屋根にかへりきて
喜こび鳴くよ。巢は空の
木よりゆかしと知るや君

〔20オ〕

兄

残んの城とたちこもり
真誠を頼む団欒をも
あはや無慙の大浪に

捲かれも行かん人は此処

〔20ウ〕

蛇にまかれて悲鳴する

若き雀に似たらすや

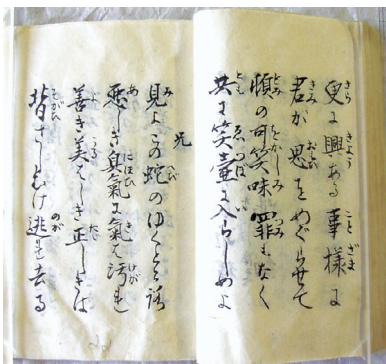
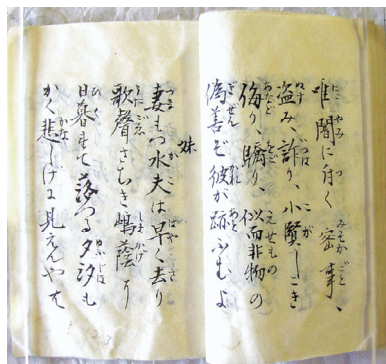
あゝ石とりて誰かよく
かの鎌首を砕かん乎

〔21オ〕

妹

友をうしなひ唯独り
夕ぐれ坂に鳴き細る

若き羊もかくばかり
沈みて物を思はんや

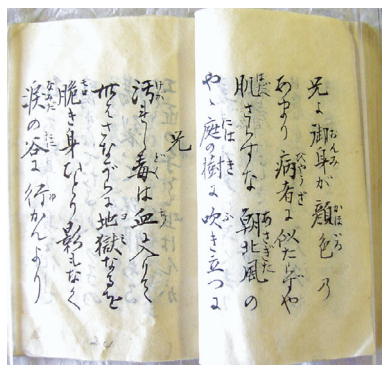
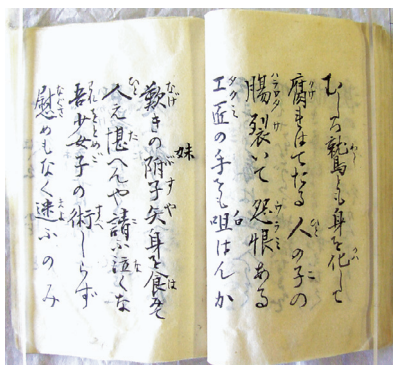


〔21ウ〕
 更に興ある事様に
 君が思をめぐらせて
 頓の可笑味罪もなく
 共に笑壺に入らしめよ

兄
 見よこの蛇のゆくところ
 悪しき臭氣に氣は汚れ
 善き美はしき正しきは
 背さしむけ逃れ去る

〔22ウ〕
 唯闇に付く密事、
 盗み、詐り、小賢しこき
 侮り、驕り、似而非物の
 偽善ぞ彼が跡ふむよ

妹
 妻もつ水夫は早く去り
 歌声さむき嶋蔭に
 日暮れて落つる夕汐も
 かく悲しげに見えんやは

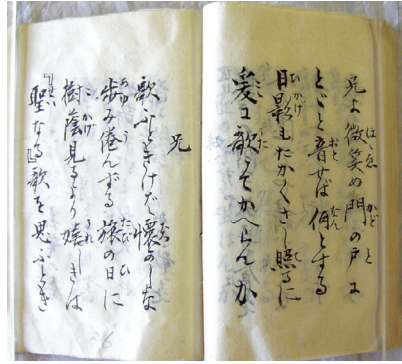
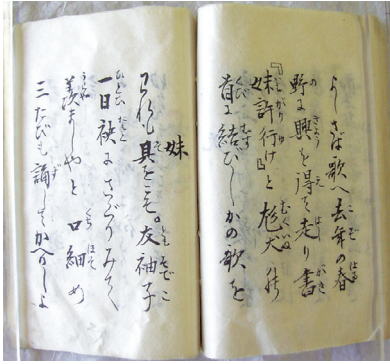


〔23ウ〕
 兄よ御身が顔色の
 あまり病者に似たらずや
 肌さらすな朝北風の
 やゝ庭の樹に吹き立つに

兄
 汚れし毒は血に入りて
 世はさながらに地獄なるを
 脆き身ひとり影もなく
 涙の谷に行かんより

〔24ウ〕
 むしろ驚とも身を化して
 腐れはてたる人の子の
 腸裂いて怨恨ある
 工匠の手をも咀はんか

妹
 歎きの附子矢身を食みて
 人え慍へんや請ふ泣くな
 吾少女子の術しらす
 慰めもなく迷ふのみ



〔25ウ〕

兄よ微笑め門の戸にとゞと音せば何とする
日影もたかくさし照るに
爰に歌うてかへらんか

〔26オ〕

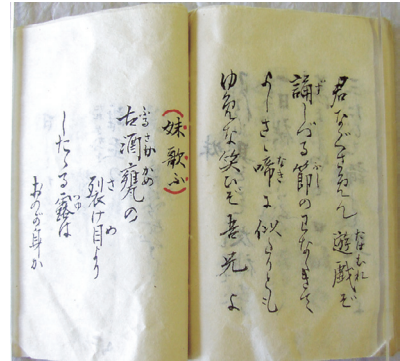
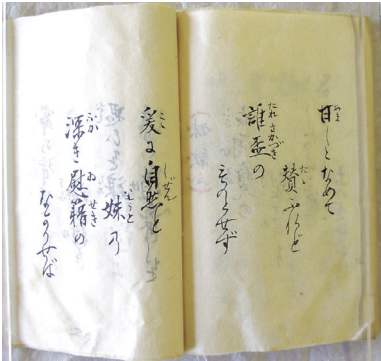
兄
歌ふときけば懐かしな
歩み倦んずる旅の日に
樹蔭見るより嬉しきは
『聖なる』歌を思ふとき

〔26ウ〕

よしさば歌へ去年の春
野に興を得て走り書
『妹許行け』と杉犬の
首に結びしかの歌を

〔27オ〕

妹
われも其をこそ。友袖子
一日袂にさぐりみて
羨ましやと口細め
三たびも誦してかへりしよ



〔27ウ〕

君なぐさめん遊戯ぞ
誦しづる節のわなゝきて
よしさゝ啼に似たりとも
ゆめな笑ひぞ吾兄よ

〔28オ〕

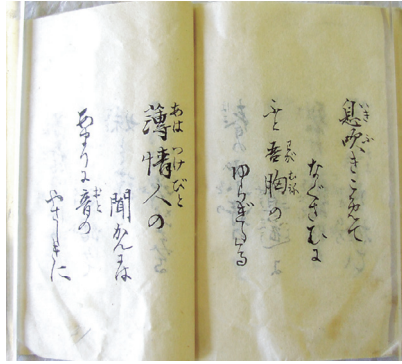
(妹歌ふ)
古酒甕の
裂け目より
したゝる露は
おのが身か

〔28ウ〕

甘しとなめて
賛ふれど
誰盃の
ものとせず

〔29オ〕

爰に自然と
妹の
深き慰藉の
なかりせば

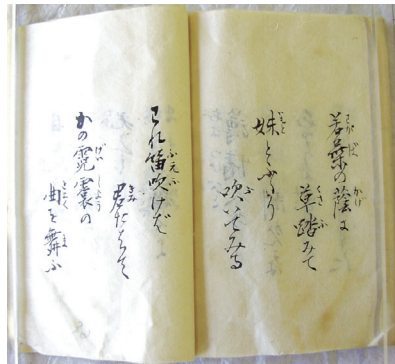
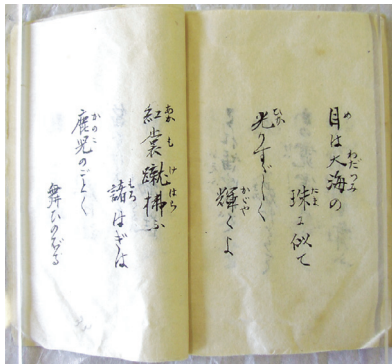


(30ウ)
息吹きこめて
なぐさむに
ふと吾胸の
ゆらぎたる

(31オ)
薄情人の
聞かんには
あまりに音の
やさしきに

(29ウ)
寧ろ背いて
海に往き
思ひを浪に
消さましを

(30オ)
春の日小野の
道遙に
裂けし小笛の
片拾ひ

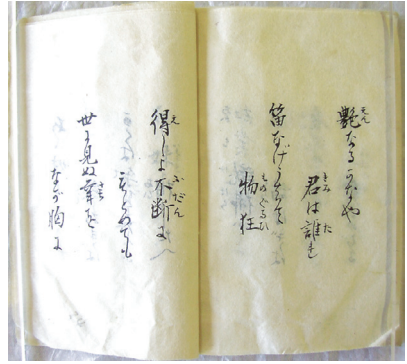


(32ウ)
目は大海の
珠に似て
光りすゞしく
輝くよ

(33オ)
紅裳蹴払ふ
諸はぎは
鹿児のごとく
舞ひのぼる

(31ウ)
若葉の蔭に
草踏みて
妹とふたり
吹いてみる

(32オ)
われ笛吹けば
君たちて
かの霓霰の
曲を舞ふ



(33ウ)

艶なるかなや
君は誰れ
笛なげうちて
物狂

(34オ)

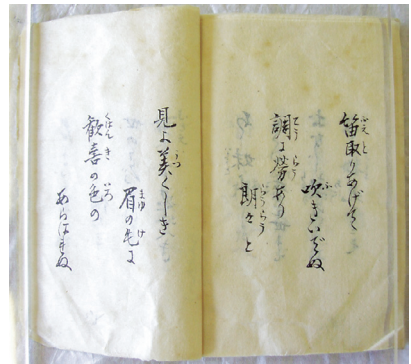
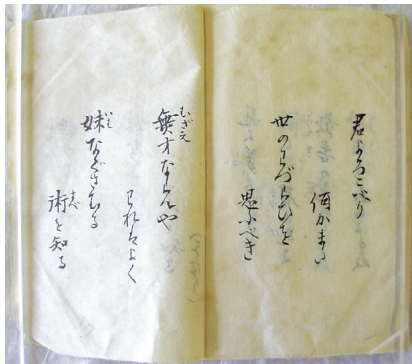
得しよ不断に
もとめても
世に見ぬ幸を
なが胸に

(34ウ)

あゝ妹よ
縁あれば
かくは手をと
相したへ

(35オ)

あゝ妹よ
来ん世にも
おなじ契の
兄をこそ



(35ウ)

笛取りあげて
吹きいでぬ
調に労あり
朗々と

(36オ)

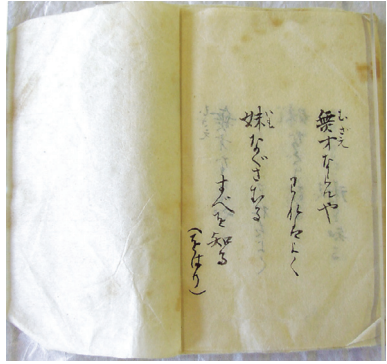
見よ美しく
眉の毛に
歎喜の色
あらはれぬ

(36ウ)

君よろこべり
何かまた
世のわづらひを
思ふべき

(37オ)

無才ならんや
われはよく
妹なぐさむる
術を知る



[37ウ]

無才むさいならんや

われはよく

妹いもなぐさむる

すべてを知る

(をばり)

[38才] (裏表紙)